

No. 101

2024.3.1

すくらむ

発行所 福井県特別支援教育センター
所在地 〒910-0846
福井市四ツ井2丁目8-1
TEL (0776)53-6574
FAX (0776)52-6272
E-mail tokuse@pref.fukui.lg.jp
URL <https://www.fukuisec.ed.jp>

- P.1 ・巻頭言 「被災地に思いを寄せて」
- P.2 ・人材育成にかかわる市町の取組紹介
- P.3 ・県外の学校の取組紹介
・センター的機能情報交換会 報告
- P.4 ・令和5年度 実践研究発表会 報告
・令和6年度 研修講座について



福井県特別支援教育センターは、
県立病院関連四施設の4階にあります。

巻頭言 「被災地に思いを寄せて」

福井県教育庁高校教育課 特別支援教育室長 玉澤 良崇 氏



まずもって、元日に発生した能登半島地震でお亡くなりになられた方のご冥福をお祈りします。また、被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、一早い復興を願います。

私自身、発災の一週間後に珠洲市へ県職員として避難所や本部の運営支援ボランティアに行きました。手洗い、水洗トイレ、温かい食事、お風呂・・・など、普段の生活で当たり前になっていること一つ一つの有難さを改めて感じました。

また、ボランティアは期間限定の活動ですが、被災された方々にとっては先が見えない日々が続きます。「明日はきっと」と希望を頼りに命や生活をつないでいる姿を目の当たりにし、人が生きていく上で、「先の希望」や「人とつながる安心感」がいかに大切かを身に染みて感じました。

さらに、ボランティアに携わる中でも、障がいのある子はどうしているだろう（避難所で感覚過敏の子は・・・電源確保を必要とする医療的ケア児は・・・）と心配が尽きませんでした。「地震で被災された方々のために私たちが今できることは何か」「福井県で同じ状況になることを想定して何を準備しておかなければならないか」など、私たちは、想像力を働かせ、自分事として考えていかなければなりません。災害への備え（個別避難計画、備蓄品・非常用電源の確保、避難訓練、福祉避難所 等）に関する整備の充実とともに、支援関係者の普段からの連携強化が重要になってきます。

併せて、災害時も含め、障がいのある子どもたちの「生きる力（たくましさ、自己決定、援助希求）」をいかに高めていくか、特別支援教育の果たす役割はとても大きいです。これは私たち教育に携わる者の使命であり、今後も引き続き関係者がつながって議論し実践し、次世代に向けて教育の質を高め進化させていくことが求められています。

県では、令和7年度からの第4期教育振興基本計画（5か年）の策定に向けた準備を進めており、その中で、通常の学級を含めた特別支援教育に関する指導・支援の充実や「インクルーシブ教育」の推進を目標として掲げていく予定です。それら施策の推進のためには、皆さまのお力が必要です。今後ともどうかよろしくお願いします。

人材育成にかかわる市町の取組紹介

【福井市の取組】 特別支援教育専門委員会、特コ等地区別連絡協議会（4月・10月・1月）

福井市では、特別支援教育コーディネーター（以下、特コ）を育成するために、年に3回、特別支援教育専門委員会と特コ等地区別連絡協議会を実施しています。

4月に行われた第1回福井市特コ等地区別連絡協議会では、特コとして知っておく必要がある①特別支援教育コーディネーターの役割②福井市の就学相談について③障がい児福祉サービスについて④通級による指導について⑤特別支援教育に関する参考資料の5点について講義形式で学びました。地区別情報交換会では、地区でつながりをつくるために、地区を担当する専門委員や特別支援学校、福祉機関が紹介され、各地区で学校の現状や課題、悩みなどの情報を共有しました。顔を合わせての情報交換は大変有意義でした。第2回は、10月に開催しました。こども療育センターの津田明美先生から「将来を見通した発達障がいのある子どもの支援について」というテーマでの講義を聞き、脳の機能が異なっている発達障がいの特性を具体的に教えていただき、「教え方を変える」「教える順番を変える」「教える内容を変える」必要があること、表出スキルを育てていくことで「強度行動障がい」を防ぐことができることを学びました。第3回は1月にオンラインで行われ、福井市教育委員会（以下、市教委）から「最近の特別支援教育の実際」について、森下麻美先生より「通級指導の実際 ～通級指導担当者としての実践を通して～」についての講義を聞きました。地区別連絡協議会では、地区別に分かれて移行支援についての意見交換をし、「引継ぎの仕方については、校区内でやり方の共通理解を図るとよい」など積極的な意見が出されました。

特別支援教育専門委員会では、昨年度、特コ等地区別連絡協議会で学んだ「強度行動障がい」についてのグループ協議を実施し、強度行動障がいは予防することができること、自症スペクトラム症の正しい理解と対応の必要性を改めて確認し、理解を深めました。



【奥越地区の取組】 特別支援教育研修会（5月・11月）

奥越地区では、年に2回特別支援教育研修会を行っています。どの学校にも支援や配慮を必要とする児童・生徒が増えていて一方で、特コとして経験年数の浅い先生方も増えてきました。校内で特別支援教育の推進役となる特コの校内研修をサポートしている大野市・勝山市教委の取組を紹介します。

R5校内研修テーマ：「全ての児童生徒が安心して学べる学校づくりのために」

1. 全ての児童生徒が安心して学べる学校づくりのために実施していることを付箋に書く、
2. ①児童生徒への対応 ②連携（校外） ③連携（校内）の3つに分類。学校の強み弱みを共有する

第1回（5／30）

市教委の指導主事が進行役となり、実際に自校で実施していることを付箋に書いて、特コ同士で研修を行いました。次回までに、自校で実施するということもあって、どの先生方も真剣に参加していました。また、他の学校の取組や対応を知ること、自校の強みや足りないところに気づかれたという感想も聞かれました。「基礎的環境整備」と「合理的配慮」が法律に基づいていること、その違いをみんなで確認することができました。

第2回（11／30）

グループごとの校内研修報告、中学校区ごとに移行支援についての情報交換を行いました。「研修報告をすることで自校について今一度見直すことができました」「校区ごとの話し合いが新鮮でした」などの感想が聞かれました。

全ての児童生徒が安心して学べる学校づくりのために

【整理しよう1】
どんなことに取り組んでいますか？

児童生徒への対応	連携（校内）	連携（校外）
----------	--------	--------

【支援体制専門員派遣事業】 支援体制専門員 重神 加代子 氏

今年度は、池田町、南越前町、敦賀市、美浜町を中心に学校を訪問し、管理職、特コと面談をさせていただきました。その際に「初めてで…」「何をすればいいのか」と不安を口にされる特コの先生方に多くお会いしました。地区によっては、初めて特コに指名された先生が半数を占めているところもありました。これらの現状を受け、特コの専門性向上およびサポート強化に取り組んでいる教育委員会も多く、今回はその中から南越地方教育委員会連絡協議会管内の取組を紹介します。

夏休みに入ってから、池田町と南越前町の特コ研修会が開かれました。まず私から、特コの役割、個別の支援計画・指導計画、通常の学級における指導・支援（授業のUD化、障がいの状態等に応じた指導の工夫、学級経営）などについてお話ししました。特に、「特別支援教育の推進について（通知）」（平成19年4月文部科学省）を基に、特別支援教育の対象はすべての児童生徒であり「特別支援教育＝特別支援学級」という認識は適切ではないこと、特別支援教育は特コだけではなく学校全体で組織的に行われるものであることを強調してお伝えしました。その後、グループに分かれて、情報交換が行われました。その情報交換は大変な盛り上がりを見せ、それぞれの学校の実情や「引継ぎはどうしている？」といった具体的な話等、先生方の話は尽きませんでした。同じ仕事をする地区の教員同士がつながっていくことは、自信をもって仕事に取り組む原動力になると思います。

その後、今年度の支援体制専門員による学校訪問や上記の研修会を受け、南越地方教育委員会連絡協議会が中心となって、特コの仕事のマニュアルが作られました。そのマニュアルを手元に、地域の先生方がつながり、自信をもって特コの仕事を進めていただけることが、子どもたちの笑顔につながる一歩になると思います。

県外の学校の取組紹介

今年度、福井大学では文部科学省から「教員研修高度化モデル開発事業」を受託しました。その事業の1つとして、県教育庁職員と福井大学教職大学院職員が、協働的な学びと省察により福井県の教育の向上に寄与する実践を行うために、県外の学校や教育委員会を訪問しました。当センターからも、北海道と山形県の学校視察に参加しました。

【山形県天童市立天童中部小学校の取組】

天童中部小学校は、「学び続ける子供の育成」を研究主題として、「仲間と教師が創る授業」「フリースタイルプロジェクト」「マイプラン学習(単元内自由進度学習)」「自学・自習」の授業スタイルで、「子供がする(学習者主体の)授業」づくりの実践を積み重ねています。

<特別支援学級(いちよう学級)のマイプラン学習について>

マイプラン学習(単元内自由進度学習)は、「教科のねらいを達成するだけでなく、自分で計画を立て、学習の仕方を工夫しながら一人一人が自律的に学ぶ力を高め、学ぶ喜びを感じることでできる子供を育てる」ことを目的とした授業スタイルの1つです。

この日のいちよう学級のマイプラン学習は、特学9クラス合同で行われていました。校内のいくつかの教室やプレイルームに、「買い物コーナー」「バスの乗り方コーナー」「左右を確認する迷路」「方角クイズ」などの課題が用意されたコーナーが設置され、子どもたちは自分の好きなコーナーを回り課題に取り組んでいました。また、各コーナーの課題は、いくつかのレベルに分かれており、子どもたちは自分に合ったレベルの課題を選んでいました。教師は、各コーナーに1~2名入っており、子どもからの質問に答えたり、困っている子どもに声をかけたりしていました。

ほとんどの子どもが、自分で行きたいコーナーを決め、取り組みたい課題を選んでいました。また、課題を選ぶ際は、レベルを確認し、自分に合ったものを選び、それを終わると1つ上のレベルの課題に挑戦していました。また、分からないときには近くにいた教師に質問したり、友達同士で教え合ったりする様子も多く見られました。1つの課題をクリアすると、子どもたちは自分の学習カードに教師からもらったシールをうれしそうに貼っていました。

【市立札幌開成中等教育学校の取組】

市立札幌開成中等教育学校では、国際バカロレア(IB)の教育プログラムを活用し、課題探求的な学習を通して生徒の主体性を育てることを目指している学校です。授業時間は100分であり、生徒がじっくり課題に向き合い探求できるように時間を確保し、定期テストを廃止しています。生徒は、年間に20~30本のレポートを書き、自分の考えを表現したり、実践を振り返り自分自身を見つめ直したりしています。教師は、生徒の実践やレポートのフィードバックに時間をかけて生徒をサポートし、生徒の学びを支えていました。

教師が、生徒の考えを引き出し、表現することをサポートすることが「生徒の主体的な学び」につながり、一人一人の生徒について語り合うことが「生徒主体の学校づくり」につながることをこの学校視察で学びました。

【札幌新陽高等学校の取組】

札幌新陽高等学校は、単位制をとっています。生徒中心の学校運営が目指されており、教師が主導で学校を運営していくのではなく、教師の役割は「伴走すること」で、生徒が主体の学校を作っていこうとしています。生徒は、学級ではなく縦割りの「ハウス」で学校生活を送り、下級生は上級生を見て自分たちの将来に見通しをもち、上級生は下級生にアドバイスをするなどして、生徒同士がかかわり合いの中で主体的に学んでいくことを大切にしています。また、職員会議をなくして、生徒のことを語り合う「対話の会」を設定し、生徒のことを十分に話し合う時間を大切にしています。生徒のことを複数の視点で語り合うことが「多様性を認める教育」「生徒主体の教育」につながっており、それに伴って、生徒により変化が見られ、先生方の意欲も高まっていると感じました。

センター的機能情報交換会 報告

今年度のセンター的機能情報交換会は、5月と12月に行いました。1回目は、高校教育課特別支援教育室主任より、通級指導に関する県の取組についてお話をいただき、その後、特別支援学校のコーディネーターが、「地域の学校の校内体制をサポートする上で心がけていること」「学校間や他機関等との連携で必要だと思うこと」をテーマに、情報交換を行いました。2回目は、子ども発達支援センターフレンズあすわセンター長の渡辺浩基氏より、「強度行動障がい」についてご講義をいただきました。その後のグループ協議では、「保護者、福祉、地域等との連携について」「特学や通級への支援において工夫したことや課題」等話し合いました。グループ協議では、各校から様々な情報や質問が出され、それぞれの学校の取組や課題を共有するよい機会となりました。

強度行動障がいについて

渡辺氏より

- ・強度行動障がいは、周囲の環境やかかわりによって現れる状態である
- ・問題行動と言われる行動は、本人が困っていることを表す行動である
- ・幼児期・児童期に、本人にとって分かりやすい学び方で、適切な行動を学んでいくことが大切である

各校のコーディネーターの感想

- ・自分自身のかかわり方を振り返る機会になった
- ・今日のお話を校内で共有し、理解を深めたい



令和5年度 実践研究発表会 報告

令和6年2月6日(火)に実践研究発表会を開催しました。当センターと参加者を遠隔システムでつないでの実施は、4年目となりました。今年度も、園、学校、関係機関など100名を超える方々のご参加をいただきました。当日は、特別なニーズのある子どもを支えるための連携や協働を通じた取組について、6つの実践報告をしていただきました。参加者からチャットで質問や意見を募り、発表者にお答えいただきました。最後に、福井大学連合教職大学院の荒木 良子氏、小嵐 恵子氏、南雲 敏秀氏からご高評をいただきました。

参加者の声



- ・色々な校種の実践例が聞けて、よかったです。子どもを見取ること、寄り添うことの大切さを改めて感じました。(小学校教師)
- ・毎年参加させていただき、本校での支援に役立てています。(高校教師)
- ・今日の発表を聞き、教育の考え方を学ぶことができました。連携というのには、お互いを知るということも含まれると改めて実感することができました。(医療関係者)
- ・今回の勉強会を通して、教育と福祉の連携、さらには、保健、医療とも連携し合えればと思いました。(福祉関係者)

【仁愛女子短期大学附属幼稚園】

医療的ケア児を支えた園のインクルーシブ教育の取組

医療的ケア児に対しての園の方針や取組の様子が素晴らしいと思いました。「みんなといっしょ」から育つ周りの児童のかかわりが素敵でした。周りの子どもたちも互いに学び合っていく姿がとても暖かく、一緒だからこそ学べることもあるのだということ強く感じました。

【池田町立池田小学校】

特学の児童の学びを広げるための校内外の連携の取組

児童の中の、学びたい、知りたいという気持ちを上手くくすり、主体的に学習に取り組む姿が印象的でした。また、外部の人との連携ももちろんですが、子どもとの連携が大切だと聞いて、もっと子どもの声を聞かなければいけないな、と思いました。

【県立丸岡高等学校定時制】

生徒支援と学校設定科目「ライフスキル」の取組

高校の現場が変化していていることが感じ取れました。学校を見学しに行く機会があれば、ライフスキルや各教科の授業などもぜひ見てみたいと思いました。高校段階でのしっかりした受け皿があれば、小・中での授業や進路指導にもゆとりをもって臨めると感じました。

【嶺南東特別支援学校】

子どもの主体的な姿を引き出す授業づくりの取組

教師のねらいは児童の実態に合っているか、一足飛びになっていないか、というコメントが印象に残りました。教師が、学びを発展させたいと、先を急いでもうかがいがちだが、児童生徒の実態を踏まえ、思いを受けとめながら授業をつくり、展開していくことの大切さを改めて感じました。

【越前市児童発達支援センターなないろ】

家庭・教育・福祉の連携推進の取組

福祉の強みが、やはり家庭支援にあること、事例をもとに、家庭(保護者)への寄り添い方を具体的に教えていただき、大変参考になりました。教育と福祉の相互理解のために、「顔の見える連携の機会」を重視した情報共有がなされていることが印象に残りました。

【県特別支援教育センター】

中学校の現状に合わせた校内連携や支援の充実の取組

中学校における校内支援体制整備の重要性を改めて認識しました。その上で、特コが中心となり、中学校の強みである教科担任会を活用した生徒の実態把握や支援の方向性の検討を行っていく工夫が大変よいと思いました。限られた時間への工夫として、情報シートの作成や活用も参考になりました。

令和6年度 研修講座について

次年度の研修講座は、**8講座**の開催を予定しています。そのうち6講座は県外講師による講座で、Zoomを使った**オンライン研修**となっています。各学校や市町の**現職教育として活用**していくこともできます。

当事者の方の
お話が聞けます!



No.1「読み書きに困難がある子どもの理解と支援」

大阪医科薬科大学 LDセンター 顧問
大阪教育大学 名誉教授 竹田 契一氏
岩手大学農学部 4年 山口 幸強氏

No.3「自閉スペクトラム障害の理解と支援」

フリーランス児童精神科医 門 眞一郎氏
小道 モコ氏

詳細は『**研修講座 掲示板**』をご覧ください。
(当センターホームページ ▶
R6年度 研修講座 をクリック)

申込期間:4/22(月)~6/28(金)

申込方法が一部変更になるため、現在準備中です。
システムが整い次第、お知らせします。